

『詩経』 齊風 「猗嗟」

【原文】

猗嗟

猗嗟昌兮 頎而長兮

抑若揚兮 美目揚兮

巧趨踰兮 射則臧兮

猗嗟名兮 美目清兮

儀既成兮 終日射侯

不出正兮 展我甥兮

猗嗟變兮 清揚婉兮

舞則選兮 射則貫兮

四矢反兮 以禦亂兮

【読み下し文】

猗 嗟

猗嗟 昌んなり 頎而として長く

抑若として揚なり 美目 揚き

巧趨 踰たり 射ることも則れ臧し

猗嗟 名んなり 美目 清なり

儀 既れ成ひ 終日 侯を射るに

正を出でず 展に我が甥なり

猗嗟 變きなり 清揚 婉しく

舞ひては則れ選ひ 射ては則れ貫き

四矢反る 以て亂を禦ぐ

【現代口語訳】

なんとも立派だ。身の丈はすらりと高く、

美しい広い額は際立ち、美しい目もとは（涼しげにパチリと）開き、

小走りの姿も好く、弓引くも（また）上手なことよ。

なんとも立派だ。美しい目もとは清らかで、

射儀の姿も整い備わり、終日侯を射るが、

的をはずれない。まことに我が甥よ。

なんとも立派だ。目は清らかで美しく、

舞っては（その姿よく）整い、弓射ては的をはずさず、

四矢はみごとに重なる。国の乱れを禦ぐに足る頼もしい人よ。

【深読み、背景】

《詩序》猗嗟は、魯の莊公を刺るなり。齊人、魯の莊公、威儀技芸有れども、然れども礼を以て其の母を防閑する能はず、子の道を失ふ。人以て齊侯の子と為すを傷む。

《集伝》齊大極めて魯の莊公の威儀技芸の美なることを道ふこと、此くの如し。其の礼を以て其の母を防閑する能ざるを刺る。惜しい哉、其れ独り此を少くと曰ふが若きのみ。

詩序・集伝共に、魯の莊公の母文姜は、この兄、齊の襄公と通じて、しばしば齊に往って密会するという不倫の行為をした。それを子である魯の莊公が防ぎ止められなかったことを刺るとする。やはり、文姜と襄公の史実に基づいて解釈している。これは、集伝が「此の詩三章、譏刺の意は、言外に在り」（この詩を一読すれば、ただ射儀のすぐれていることを賛美している内容がかがわれるだけであるが、言外に譏刺の意が含まれている）というように（嚴粲も同じ）、言外にある内容を読み取った結果といえよう。しかし、言外に文姜と襄公、その子莊公のことを読み取る必然は何もない。

さて、訳者はこの詩を、何に着目して解釈したか。一つは、この詩は一読して分かるように、射儀を行う人の立派な容姿を描写したものであるということ。二つは、赤塚忠が「国風においては邶風の簡兮篇、王風の君子陽陽篇、齊風の猗嗟篇、陳風の宛丘篇のごとく、雅においては賓之初筵篇のごとく、現に舞っている事実を詠じているものがあることは、これらの場合における詩が歌樂の奏と共に舞われたと見る方が自然である」と指摘するように、この詩の中で射儀を行う人が「舞」を舞っているということ。この「舞」の意味は（齊風「甫田」篇の「余説」参照）、赤塚忠が「雨を求める方法はただ一つ舞であった。ここに現在知り得る限りでは最も原初的な舞の意義を規定することができる。舞は農作物の生長を助ける呪術であったのである。（中略）すくなくとも王は巡行に当たっては巫者を引具し、征伐祭祀等の事あるに由って巫者を舞わしめたのである」というように、「舞」は祭祀の場面で使われると呪術的行為の意味を持つということである。さらに赤塚忠は、「舞」には降神・招神・神霊の妥安などの意味があることも説明する。つまり、少なくとも「舞」には宗教的意味が付加されているのである。つまり、この「舞」についている事実を詩に詠じている意味は、降神・招神を表しているのである。三つは、『礼記』射儀篇に「此れ天子の諸侯を養ひて兵用ひずして、諸侯自ら正しきことを為す所以の具なり」とあるように、射儀は諸侯がおのずから好く治まってゆくための、方法にもなっている。つまり、正しく射儀が行われているということは、国の平安が保たれていることを意味するのである。

以上、この三点と、今まで述べた家井真の国風の諸篇は「宗教詩」であるという指摘を基に解釈してみると次のようになる。

「降臨してきた神霊・祖霊に、射儀を行う人の立派な容姿、そして舞を舞っている姿を謡うことによって国がよく治まっていることを告げ、さらなる福祥を祈願する歌舞を伴う宗教詩」ということになる。

【参照】『新釈漢文大系』「詩経」 明治書院